

# ある病院小児科にて (二)

堀 越 清



前回では東大分院小児科でのカンファレンスがどんな働らきをして  
いるか、またそれを中心として各専門家即ち医師、ナース、ソシ  
アル・ワーカーがどのように動いているかなどについてお話しいた  
しました。ひとりひとりの患児についてそれぞれの専門分野での知  
見を持ち寄り、そこで生じた問題を解決しようというわけです。：  
……そこへ心理学の分野から私に加わったのですが、私はどう動い  
たらよいのでしょうか、前述の人々の活動でこちらが動く余地は大  
して無いように見えますが、そこは餅屋といましようか、そ  
れなりにやるべき事が出てきます。よく世間では心理学と言えばす  
ぐ知能テストとか性格テストと言ったテストのことを思い浮べます  
が、ご多聞に洩れずここでもテストが必要な場合があります、そ  
の時は私がテスト要員となるわけです。特に幼ない子どもが入院し  
た場合、しばしばその病気とは別に心身の発育の遅れが目立つ子ど  
もがいます。前回に述べた「小頭症」の子どもなどはもうテスト以  
前の段階でテストにのりようがありませんからどうする事もできま  
せんが、それは例外として、その他に、カンファレンスで「あの子

はどうも発達が遅れているのでは……」と問題になる子どもが出て  
きますと、先ず入院の際にとった生育歴を調べるのですが、いわゆ  
る「話し始め」とか「歩き始め」が「一才半以後になって現われる事  
がこうした子どもにはよくあります。(もっともお誕生頃に現われ  
るのが普通とされていますがその頃重い病気にかかるとうしても  
発現はおそくなります。それとか脳神経系の病気例えば脳性小児マ  
ヒとか日本脳炎にかかって発現が遅れていく子どもを除きます)そ  
ういう時そのままにしておく、こういう子どもは小学校入学にな  
って漸く遅れている」ことが分つてから慌てて対策をたてた事  
になりがちです。それでは何かとまずい事が多い。できれば早い中  
に「発育の遅れ」を客観的な手段で調べて親にその現実を認めさせ  
た方がよいのではなからうか、いわば「精神薄弱児の早期発見及び  
対策」という見地から知能テストの必要が生じることになりました。  
しかしそうは言ってもこれは「遅れ」が或る程度外見でも認められ  
るような時に限ります。たいていはその子が「普通児かどうか」は  
テストをしなくても分りますし、したがってテストをするのは余程

の場合なのです。ですから、その疑いが無いのたとえ親がテストを希望したとしても、もちろんテストはいたしません。それでもテストを望む親には「話し合い」で解決するようにしています。そこで私がテストをする事は極めて少ないことになりました。いわば精薄児の識別の必要に迫られた時だけです。ではその他には、何か気になるような心理的症狀を示す子どもが出たらどうするかといいますと、何かテストをやって時間を使うよりは遊戯療法をやったり、神経科の医局に紹介すればいいので、今のところ他のテストもやっではおりません。もっとも研究の為なら行ないますが、それは将来はともかく、現在いる子どもに直接どうこうというわけではないので、それは別の事柄になります。……テスト以外の事で私がやるものは幾つかありますが、その中の一つは、親がその子どもの病気に関することとは別な事で医師やナースに訴えてくる、例えば、「家の子はどうも落ち着きがない」とか「学業が振わない」とか「仲間とうまく遊べない」などはよくあります。そういう時、医師、ナースはそれぞれ仕事の事で手一杯でそれでもいちおうそうした訴えに耳は傾けますが、到底とことんまではきいてはやれない、そこでそうした事はむしろこちらの「鼻」ですから私が話し相手になるのです。たいていの場合はこうした話し合いで子どもが退院するまでには取まるのですが、それでも後をひきそうな人には、私一人では手が廻りかねますので学内の教育相談室へ紹介することになっています。もっとも相談室の方も受入れに限りがありますので、できるだけここで解決しようとしています。先だってこういう事がありました。それは、子どもの病気が何か家庭の事情から生じて、入院

させれば治るのだけでも、退院して家庭に戻るとまた再発のおそれがあるような病気ですが、これは下手をすると入院、退院、また入院といった悪循環を何度も繰り返す可能性があります。そこでどこかでその悪循環のくさを断ち切らねばならないことになりました。もう少し具体的にお話し致しますと「拒食症」と呼ばれる病気がどうもこれにあたるようです。これはものを余り食べなくなる事から始まり、遂には全然食物を受けつけなくなるような症状になります。原因は子どもによっていろいろあり、いち概には断定できませんが、多くは家庭の事情に起因しているのではないかと思えます。先日、こうした症状の五才の男の子が入院してきました。何でもまる二日位全然何も口に入れてないので親が驚いて入院させたとのことでした。そうして附添って来た母親は、わが子可愛さか或いはそれまで余り子どもと離れた経験がなかったのかはともかく、片時もこの子の側を離れず何かと世話をやこうとしている。他方当の子どもの方は始めは温和しくベットに寝ていたが、同じような年頃の子ども達が病室から出たり入ったりして（いずれも入院児です）が「仲間を作って楽しそうに遊んでいるのが彼の目に入ってくる。とそこは小さい子どものこと、二日も食べてない事なんか忘れてベットを下り、連中の遊びをのぞきに行こうとしている。傍にいる母親は慌てて「じっとして寝ていらっしやい」とたしなめているが彼は不服の態である。しかしこの子は何も食べてないという事以外には健康に異常はないので、病院側は別に彼に安静を強いているわけではなく好きなようにさせている……、そこで彼をたしなめている母親が「子どもの事は病院に委せるように」とナースに注意をさ

れた。更に面会時間以外は親は子どもを病室に置いて帰宅するよう  
にと言われた。ところが親としては離れたくないし、子どもの方  
も「お母さん僕を置いて帰っちゃうんじゃないか」と同じような不  
安な気持ちでいるので双方何となく別れたくない。困った母親は、  
子どもが寝入ってからそうと気がつかれないように病室を抜け出  
ようとそれでも別れる決心をしてチャンスを待ったのですが、どっ  
こい彼の方はなかなか寝てはくれない。ようようの事で彼が眠りに  
入ったらしいのでこっそり出ようとした途端に眼をあいた子どもが  
「お母ちゃんどこへ行くの」とやって母親がびっくり、せつかくの  
決心も出鼻を挫かれて始めの状態に逆戻りの始末。……こうした  
光景が二、三度繰り返されるのを見た主任のナースが「お母さん、  
子どもに黙ってこっそり帰るといっけい、起きている時  
に、次は何日何時頃来るとちゃんとお約束をしてそうして別れて下  
さい、後でお子さんが少し泣いても子どもはすぐなれますから……  
」とすすめた。納得した母親はまだかなり不安ではあったが、思  
い切って言われたように彼とはっきりお約束して後は逃げるよう  
に別れた。

子どもはその当座はちょっと泣きそうだったが、小一時間もする  
とそれも収まり、先刻の子どもの達がにぎやかに遊んでいる音を耳に  
するとベットから下りてその方へのぞきに行つた。やがて仲間に加  
わるようになった。その後食事の時間(夕食)になりましたが、お  
もしろい事にその前の食事時間には母親が傍で何とか口に入れさせ  
ようと努めたにもかかわらず全然著もつけなかったこの子どもが、  
少しではあるが口へ入れるようになりだした。それが日一日とたつ

につれて次第にものを食べるようになり、家庭では偏食が激しくて  
困ると言われていたのにしまいは何でも食べる、一週間後には小  
児科入院児の中で一番喰べる子どもになった……もうそうなれば治  
ったも同然です。

……他方、母親も最初の一日二日は何となく不安で家にも気  
にかかっていたらしいが、ナースの言つた通り、子どもの状態が目  
に見えてよくなるので感ずるところがいろいろとあつたらしい。も  
ちろん始めの不安などは三日位で解消し、今度はよくなっていく子  
どもの現実からそれまでの自分の「在り方」を反省するようになって  
きた。結局この子は後一〇日の入院ですっかりよくなって退院の  
運びになったのですが「果してこのまま家へ帰してどうか」という  
事がカンファレンスの問題となりました。即ち拒食症はここでは治  
つたが、原因がはっきりしない、しかしどうも家庭状況にその一因  
があることは推測できる、とすると彼をそうした家庭から離してこ  
こへ入れた事とか、母親の接触時間を少なくした事とか、遊び仲間  
がここにいた事などが何か治療に役立ったものと考えられる。そう  
した効果と言うか、彼の経験なるものが、家庭へ帰って果してどの  
位きいているだろうか、どうもぶり返しそうだ、一度母親と誰かが  
その事で話し合つてみる必要があるろう……というわけで私が三回程  
お会いしました。細かいいきさつは省きますが、母親の次のような  
ことばだけを紹介しておきます。すなわち、「入院させた当時、そ  
れまでこの子と離れたことはなかったし、何かそのまま置いてはい  
けない気持もあった、ナースに言われてあの子とお約束をして別れ  
たが、それをするのに私としては相当な勇気を必要とした。何か高

いところから飛び下りるような、それこそ目をつぶる思いでやったのだが、今からみればそれがよかったと言うか、とにかくいい経験になったと思っている。しかもあの子は病室でお友達もできたり、食も進むようになった。何だかこうなってみれば何でもないようでもあるが、何かが欠けていたようにも思う。考えてみれば家の中では、私はしゅうととやり合っつことで精一杯だったが、この子を余りかまけてやらなかったのだし、あの子にしても姑と何かと言えざいざこざを起した事もあるし、そうかと言って家の外に出ても近所に遊び仲間らしい子どももなかった事が、何かこの子の気持に充きれないものがある、うずうずしたものが先日のような病気になったのではないかと思う。今までも程度の軽いものではあったがあれと似たような事があったのに、ついそのままにしておいたことがあんな事になったのかもしれない。もう少しあの子の身になってやらねば……。これはここ二、三日考えていたのだが、先ずあの子に遊び相手を見つけてやるのが大切だと思ひ、近所にはそれが無いから、どこか幼稚園か保育園に弟といっしょに入れてみようと考えている。それがどうなるかは分らないけれど、この間の経験もある事だし、やってみなければ分らないのだから先ずやってみて、その時に何か起つたらその時はその時で、と言うつもりです」という意味の事を言われ、私から別れてこの母親はすぐに実行にかかったらしい。三度目に会いました時には「今日或る保育園に入れる手続きをしてきた。今頃では幼稚園は満員だし保育園でもいいと思つてゐる。あれからあの子はまたまた食事が進まなくなり、ぶり返すのではないかとひやひやしたが、その後は徐々ではあるがまた食べ出し

てきているので、これからは、いろいろとあの子の身になってやればうまくいくのではないかと思う。もしだめの時はまたお願いにあげますから……」と述べて別れましたが、爾後は何とかうまいつていようです。

これは子どもの入院を通じて母親自身の努力と経験が、後の問題解決に役立った例になるのかもしれないが、それを当事者の口から何うことができたのは私にとつてもまたとない経験でした。……その他入院時に母親が子どもの夜尿を訴えたのに入院中一度も夜尿を起さなかつた例とか、退院後家庭で母親がルーズな事をして逆に子どもから「お母ちゃん病院ではこうだったよ」とたしなめられて親がハツとした話とかは、病院を幼稚園という場所に置きかえれば案外似たような事があるのかもしれない。……話しはちょっと脱線しますが、いわゆる「長期入院児」で幼稚園や小学校に籍のある子どもはどうしてもその間は長期欠席になるわけですが、担任の先生がその子どもを見舞つたという話しを余り耳にしないのが私にはちょっと気懸りです。……先頃、小児ヒステリーの病名を持つた子どもで、家庭の経済事情の為中途退院してしまつたケースがありました。が、医局ではそのまま放っておく気にもなれないので早速ソシアル・ワーカーに頼んでその後の実情を調査してもらいました。どうもその子は学校にも行かず家の中に留守番(母一人子一人の家です)ともつかずただぶらぶらしているらしい。ソシアル・ワーカーはその学校にも行って前担任や現担任といろいろ話し合つたようですが、当の学校側ではそれまではこの子について殆んど手を打つていないらしいには、ちょっと驚きました。これなどは極

